

感じ乍ら、歩き心地よく耗つたこの下駄を、夏休みまでは穿きたいものだなと思つたりして、靜かに葉櫻の繁みの下蔭を辿つて行つた。

沈靜の底より

三年 茂里子

「たう／＼夏がまゐりましたのね、」さう親しい友への手紙を書き出して、私はそつと目をうつししました。雨がしと／＼と、窓際のつげの木に降つてゐます。その生き／＼した新芽にも、そして固い、くろすんだ幹にも、同じ様に緑の雨が靜かに降つてゐます。

「この雨が晴れたらあの強い光の時が来るのだ。」かう思ひ乍ら、私は窓に手をかけて、やはり外を見つめてゐました。

かなめ垣の外を傘を傾けて、小さい女の子が通りました。庭たづみにゆら／＼と振袖がうつると、紅と緑の浪がもつれあひました。お琴のお稽古にでもゆくのでせうか。紅い帯をきちんとおはさみにしめた後姿が、垣の角を右に曲ると、見えなくなりまし

の捧げられる時」といふ、細い、幽かな、清い、朗らかな囁きをききました。

みちばた

一年 善子

みちばたに、私といふものが此處に居るので、とも何とも言はずに、小さい草がそつと咲いて居る。

ともすれば、心ない人に踏まれても了ひさうなあぶないみちばたに、それでも、春の色を淡緑に見せて、可憐にふるへて居る。何と言ふ名か。知らぬ。植物學者の目にもとまらず、ただ塵にまみれて、花もつけずに、生きては枯れる名なし草ではあるまいか。小川のはどり、野の末に、生える小草を、あはれだと、人はいふ、心をとめる者もない往還に、そつと咲いて戦いて居る此の草を、何といはうか。あはれとは、あまりに軽い言葉である。電車の轟、荷車の音、雜然たる音響に、はげしく邊りは、動いて居る。さうして、だあれも、此の草を知らないのだ。草もだまつて、ひそ／＼と生きて居る。

た。それで私は、

「私の窓の前にも夏が見えます。雨の中を小さい女の子が通ります。」と書いて、すぐ「紅い帯はい、ものですね。」とつゞけやうと、筆を執りました。その時ふと、私を呼びとめた、小さい、白い花の姿が腫の中にたゞよふ緑と紅との上に、くつきりと浮んで來ました。

「何だらう。」かう思ふと、又書くのを止めて、私は窓から首を出してみました。

雨だれおちの所に雪の下が咲いてゐるのでした。小さい子のリボンのやうな花が、雨だれの響にふるへ乍ら咲いてゐるのでした。

きつと一日中雨が降つてゐれば、一日中この花はふるへてゐるのでせう。

私はもう手紙も何もかきたくありませんでした。誰かを呼びかけて、このふるへからひろがつて來る心のゆらぎを皆きいて貰ひたい、と思ひました。

「い、え、それでも私の望むすべてではない。」と、うらぎる心の叫びが、遠く／＼消えて行きました。と、いひしらぬ沈靜の奥底から、「ほんとうの祈り

この間の晴れた日に、地理教室から直白な富士を鮮やかに見得た私は、九段を歩いてゐた時にふとこの事を思ひ出した。九段から富士が見えると思ひ出たので。

で、其の方角を見なければ、雲ばかりである。今まではたゞ、今日も見えないなど、それ以上氣にも止めなかつたが、一度はつきりした姿をみた私はそれではすませなかつた。雲があるから見えない。あの雲がなければ！
いや雲のあなたに、富士は何時もあの姿であるのだと思つた。

◎笑 顔 終 江

運動會の日であつた。
焼けつく様な陽を受けて砂はきら／＼と光つてゐた。
乾き切つたカラウンドへ水を撒く爲に年寄な小使が車を引きまわした。車が重いのでよ／＼と歩く様子が可笑しいのか皆が一度に／＼と笑ひ立てた。すると小使も同じ様に一所になつて笑つた。質朴な無邪氣な善良な笑顔であつた。私は涙の浮ぶを感じた。